

## 中世ポルトガル語テキスト *Horto do Esposo* における 接語代名詞の位置について

水沼 修

### 1. はじめに

現代スペイン語において、動詞が定形(1)の場合には接語代名詞は動詞の前に置かれるのに対し、動詞が命令形(2)で用いられる場合、または不定詞(3)や現在分詞(4)の場合には接語代名詞はこれらの後ろに置かれる。

- (1) *Le* pedí que me lo contara.<sup>1</sup>
- (2) *Dáselo* a tu hijo.
- (3) Queremos seguir viéndolos juntos.
- (4) Tengo que contarte algo.

言語によって特徴は異なるものの、このように接語代名詞が動詞の形に依存する傾向は、フランス語やイタリア語などの現代ロマンス諸語の多くに見られる。

一方、ブラジル・ポルトガル語においては、動詞が定形(5)の場合であっても、不定詞(6)や現在分詞(7)の場合であっても、接語代名詞が動詞の前に置かれるのが一般的な語順とされており、話し言葉においては、その傾向は特に強くみられる<sup>2</sup>。

- (5) O chefe me despediu.
- (6) Você não pode me despedir.
- (7) Ele está sempre me provocando.

これに対し欧州ポルトガル語においては、スペイン語のように動詞の形によって接語代名詞の位置が定まるわけでも、ブラジル・ポルトガル語のように接語代名詞が常に動詞の前に置かれるわけでもなく、これはロマンス諸語の枠組みにおける現代欧州ポルトガル語の重要な特徴の一つとして挙げられることが多い<sup>3</sup>。

### 2. 現代欧州ポルトガル語における接語代名詞の位置

- (8) O João emprestou-me o carro.

現代欧州ポルトガル語においては、話し言葉においても書き言葉においても、動詞の直後が接語代名詞の規範的な位置(8)であるが、ある特定の語句が動詞の前に生起する場合には、接語代名詞は動詞の前に置かれる。

\* 本研究は JSPS 科研費 23K00477 基盤研究(C)の助成を受けたものです。

<sup>1</sup> (1)-(7)の例文は、Martins (2016:402)より。下線は筆者によるもの。

<sup>2</sup> 話し言葉では、動詞が命令形の場合でも代名詞が前置される。(Me dá um beijo.)

<sup>3</sup> 以下の例のように、現代欧州ポルトガル語では、動詞が直説法未来形または過去未来形の場合に限り、接語代名詞は活用語形の中に置かれ、動詞の後ろに置かれることはない。

Os serviços avisá-la-ão da data da prova.

Se me fizesse essa pergunta, recusar-me-ia a responder.

Mateus, M.H.M et al. (2003: 865)

このように接語代名詞の後接(*próclise*)を誘発する語句は、*proclisador*<sup>4</sup>と呼ばれることもある。代表的なものとしては、否定辞(9)、疑問詞(10)、補文標識(11)、数量詞(12)、特定の副詞(13)などが挙げられる。

(9) O João **não** me telefonou.<sup>5</sup>

(10) **Quem** te disse que ia hoje jantar contigo?

(11) Sei **que** o João a viu no cinema ontem.

(12) **Todos** os imprevistos a põem doente.

(13) A Maria **também** nos viu.

現代欧州ポルトガル語においては、このように、*proclisador*が共起するかどうかによって動詞に対する接語代名詞の位置が異なる。

### 3. 中世ポルトガル語における接語代名詞の位置

一方、13世紀から15世紀にかけてのポルトガル語テキストにおいては、(14)のように、*proclisador*が生起しない文脈で、接語代名詞が現代語のように動詞の直後に置かれている例と並んで、動詞の前に置かれている例も確認される。

(14)<sup>6</sup>

13世紀 (Doc. de 1260, Chancelaria de D. Afonso III)

e eu enuieyuos dizer per mia carta que me prazia

E rey uos me enuiastes dizer per uossa carta que uos desembargariades esse castelo

14世紀 (Crónica Geral de Espanha de 1344)

E el rey abraçouho e beyjouho e fezlhe muy grande honra.

o Cide lhes fez muita honra e lhes deu grandes doas em ouro e prata e cavalos e outras cousas

15世紀 (Fernão Lopes, Crónica de D. Fernando)

E quando el-rrei ouvio que elle entrara e que os seus corriam a terra e rroubavom, pesou-lhe muito de os leixarem assi entrar

e quando entende outra vez de mover esta guerra, lhe escreveo que falasse com o duque e com seu irmão

中世ポルトガル語のテキストではこのような例は決して珍しくなく、これは接語代名詞の位置が現代語とは異なる様相を呈していたことを示唆する。接語代名詞の位置に関し、その歴史的推移を調査したMartins(2016)は、13世紀のポルトガル語は現代語と似たような状況、つまり、*proclisador*が生起しない場合には、接語代名詞が動詞の直後に置かれるのが一般的だったと推測している。しかし、14世紀になるとこのような文脈において代名詞が動詞の前に置かれる例が見られることが徐々に増え、時代が進むごとにその傾向は強まっていく。そして16世紀になると接語代名詞が動詞の前に置かれるケースが大多数を占めるようになるが、この辺りを境に、また代名詞が動詞の後ろに置かれ

<sup>4</sup> これ以外にも *Atractores de próclise* という用語も使用される。(Mateus, M.H.M et al. 2003, Martins 2016)

<sup>5</sup> (9)-(13)の例文は、Mateus, M.H.M et al. (2003: 854)より。下線は筆者によるもの。

<sup>6</sup> 例文は、Martins(2016:417)より。下線は筆者によるもの。

る例が増えていき、最終的に現代語のような状況に落ち着くことになったであろうと考察している(図1).

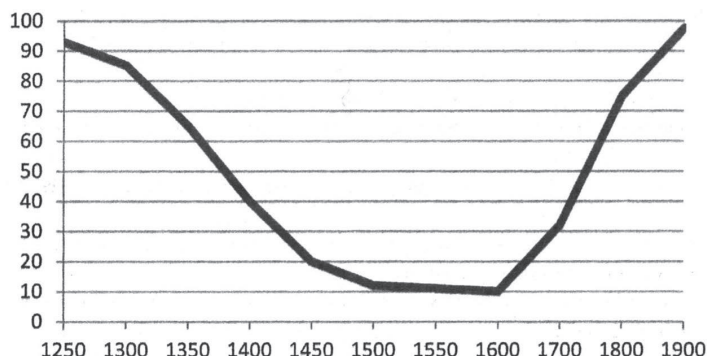


図1：proclisadorが生起しない文脈で接語代名詞が動詞に後置される割合の推移<sup>7</sup>

このような歴史的経緯を踏まえ、本稿では、中世ポルトガル語テキスト*Horto do Esposo*ではどのような状態であったのかを調査し考察を行う。

#### 4. *Horto do Esposo*について

今回調査対象となる*Horto do Esposo*は、1380年～90年に作成されたとみられる、中世の宗教的・道徳的規範を説いた作品であり、作者については今のところ詳しいことはわかっていない。

内容としてはラテン語で書かれた他の作品からの引用が大部分を占めているが、この作品の特徴の一つとして、同時代の他の多くの文学作品とは異なり、他の言語からの翻訳ではなく、オリジナルがポルトガル語で書かれたと推測されている点が挙げられる。

現存する写本は3点で、それらは、写本A(Alc.198)、写本B(Alc.212)、写本C(fragmentos 1,2,3)<sup>8</sup>であり、いずれも15世紀に作成されたと考えられている。また、それぞれの写本が作成された時期はあまり離れていないため言語状態は非常に似通ってはいるが、各写本の間には幾つかの異同も観察される。写本A及び写本Bはいずれもアルコバサ修道院Mosteiro de Alcobaçaに伝わったものであるが、Maler(1964)やModena(2016)によれば、いずれもオリジナルではなく、また、一方からもう一方に直接写されてもいない。以上を踏まえ、Modena(2016)は、図2のように伝承されたと推測している。



図2：*Horto do Esposo*の stemma codicum

同作品に関しては、これまで、主にその文学的側面に注目した研

<sup>7</sup> Martins (2016:418)

<sup>8</sup> 1997年から1998年にかけて発見された断片的資料でいずれも同一の写本に属するとされる。

究がなされてきているものの、写本で用いられている言語についての詳細な研究はあまり行われてきていない。作品が14世紀末に作成されたと考えられていることもあり、Maler(1964)によれば、そこで用いられている言語は、古ポルトガル語の全ての特徴を有しているとされている。

表1は、ポルトガル語史研究における代表的な時代区分をまとめたものである。最近の研究においては、Lindley Cintraによって提唱された時代区分が用いられることが多いが、これに基づくと、*Horto do Esposo*が作成されたとされる時期は、古ポルトガル語(*português antigo*)の時代の最終盤に相当し、また、現存する写本が作成されたとされる時期は、すでに中期ポルトガル語(*português médio*)の時代に差し掛かっていた可能性もある。

表1：ポルトガル語史の時代区分<sup>9</sup>

時代	Leite de Vasconcelos	Lindley Cintra
～9世紀(882年)まで	<i>pré-histórico</i>	<i>pré-literário</i>
1200年(1214～1216)まで	<i>proto-histórico</i>	
1385年～1420年まで	<i>português arcaico</i>	<i>português antigo</i>
1536年～1550年まで		<i>português médio</i>
18世紀まで	<i>português moderno</i>	<i>português clássico</i>
19世紀～20世紀まで		<i>português moderno</i>

中期ポルトガル語の時代には、現代ポルトガル語が持つ諸特徴に深く関係する重要な変化が数多く確認されると考えられている<sup>10</sup>。今回の調査は、古ポルトガル語から中期ポルトガル語への移行期に作成されたとみられる同作品で使用されているポルトガル語が、どのような特徴を有するかを明らかにする試みの一環である。

## 5. *Horto do Esposo* における接語代名詞の位置

同作品では動詞の前に接語代名詞が置かれるケースが2142例、動詞の後ろに置かれるケースが1459例確認できる<sup>11</sup>。現代語のように、*proclisador*が生起する場合には、大多数の例において接語代名詞が動詞の前に現れる。

(15) e **muyto** me prouguera que minha madre fora meu moymêto e o seu vêtore fora a mÿ morte pera sempre, (p.104)<sup>12</sup>.

<sup>9</sup> Castro(2004:73)より。

<sup>10</sup> 母音連続(-eo, -ea)の消失、語末の鼻母音(-ão)の誕生、二人称複数語尾における-d-の消失、過去分詞(-udo)の消失、所有詞の体系の変化、など(Cardeira 2005)。

<sup>11</sup> 例数には再帰代名詞の例も含む。また、これ以外にも直説法未来形と過去未来形の *mesóclise* の例が147確認された。

<sup>12</sup> 本調査では、Modena(2016)の校訂本を使用した。(15)-(40)のページ番号は同書のもの。下線は筆者によるもの。*Horto do Esposo* の校訂本は、他に Maler(1956)と Nunes(2008)がある。

(16) logo o ãtende o leon pello odor e **todo** se assanha para dar pena aa lioa que lhe fez adulteirio cõ o pardo. (p.89)

(15)と(16)では、それぞれ *muyto*(たくさん)と *todo*(全て)が *proclisador* として機能していると考えられ、同作品では、このような数量詞が動詞の前に生起する場合には、接語代名詞も常に動詞の前に置かれている。また、現代語で *proclisador* として機能する副詞についても同様の傾向が見られる(17)-(19)。

(17) E **asy** o mãdarõ eles guardar aos seus (p.99).

(18) vyo huñ pouco de mel que distilava da arvor e **logo** lhe esqueceo os perigos ã que estava (p.129)

(19) ca muitas vezes ho homẽ quanto mais mÿguado he ã no corpo, **tanto** se mais trabalha de sse apostar cõ fremusura de boos costumes (p.165)

否定文についても状況に大きな相違はなく、*nom*(*nõ*), *nũca*, *nẽ*などの否定辞が動詞の前に位置する場合に接語代名詞は動詞の前に置かれることがほとんどである(20)(21)。しかし、同作品では、このような場合に、接語代名詞が動詞の直後に置かれている例も極少数ながら確認できる(22)。

(20) Eu **nõ** a conheço, ca nũca vy a face della nẽ ainda a de minha madre depois que foy frade meor. (p.174)

(21) Este Mar Morto nõ geera nẽhũa cousa viva **nẽ** a recebe ã sy e sse lança ã elle algumas cousas vivas, (p.174)

(22) Onde diz o Salmista que o homẽ, seẽdo ã honrra, **nõ** ãtendeo-a. (p.96)<sup>13</sup>

また、(23)のように補文標識に続く場合に、接語代名詞が動詞の後に置かれる例も確認できる。

(23) Nós leemos **que** o Senhor Jhesu Christo doeu-se e chorou e padeceo doestas e desonrras, (p.217)

中世ポルトガル語においては、接語代名詞が動詞の前に置かれる場合に、両者の間に他の要素が挿入されるケースがあることはよく知られているが、*Horto do Esposo*においても、動詞と接語代名詞の間に否定辞が現れている例が数多く見られる(24)。また、同作品では、主語や前置詞句などの否定辞以外の要素がこのような位置に現れる例も複数確認できる(25)(26)。

(24) E elle respondeo que a **nõ** faria porque pareceria que o fazia cõ temor, (p.161)

(25) Ca tu as em huso dizer por sy nõ e por nõ sy, e se a **tu asy** diseres eu nõ te poderey ãtender. (p.150)

(26) Pella qual cousa leixou exemplo de muy grande humildade, o qual poucos ou nehuũs querem seguir, mas todos se **desto** devem maravilhar. (p.81)

<sup>13</sup> Nunes(2008)では、写本 A においても写本 B においても接語代名詞が確認できないことを踏まえ、以下のようになっている。

Onde diz o salmista que o homem, seẽdo em honra, nom entendeo.

しかし、Modena(2016)同様、Maler(1956)でも、ãtendeo-o となっており、これは動詞の語尾である -eo の後に続く場合、接語代名詞の o は融合する場合が多かったことと関係していると考えられる。



複文においては、(27)(28)のように接語代名詞が動詞の前に置かれる例が多数を占める一方、(29)(30)のように代名詞が後置される例も複数確認できる。

(27) asy como foy fecto a Sancto Agostinho, **segundo** se contém ã este falamêto. (p.131)

(28) E **quando** me torney a todaslas cousas que avia fectas e aos trabalhos ã que suara ã vão, vy ã todas estas cousas vaydade e afliçom do coraçõ (p.117)

(29) Onde diz Sam Bernardo que aos pobres e aos marteres he prometido asuadamête o regno dos ceeos **porque** o regno dos ceeos compra-sse pella pobreza, (p.219)

(30) E **porê** maior prol trage ao homê o nome de temeroso como a lebre ca o nome de ardido e bravo come leon, **ca** o nome de tremeroso dá-lhe titulo de sabedoria (p.212)

このような場合において、接続詞はproclisadorとして機能していないと捉えることができるかもしれないが、同作品における従属節においては接語代名詞が動詞の前に置かれることが圧倒的に多く、確認できた(29)(30)のような例の数は少ない。中世ポルトガルの他のテキストや、現代語においても同様の例が確認される点を考慮すると、これをテキストが持つ特徴であると判断することは難しいかもしれない。

Martins(2016:412)によれば、13世紀～16世紀の非文学テキストにおいて、不定詞が前置詞deとともに用いられる場合には、接語代名詞は、ほぼ例外なく不定詞の前に置かれていた。その傾向は、文学作品の*Horto do Esposo*においても確認される(31)。

(31) E o bispo ouve muy grande temor **de** o roer cõ seus dentes que avia muy espantosos. (p.84)

また、不定詞が前置詞paraとともに用いられる場合は、接語代名詞は不定詞の前に置かれることも後ろに置かれることもあり、この状態が14世紀の半ばごろまで続いた後、不定詞の前が接語代名詞の定位置になったとされる。一方、前置詞aの場合は、14世紀の半ばまでは不定詞の前に置かれる例が多く、それ以降は、後ろに置かれるのが一般的になっていったと考えられている。

このようにこの時代においては共起する前置詞の種類によって接語代名詞の振る舞いが異なっていたと推測されるが、*Horto do Esposo*では、いずれの場合にも接語代名詞が不定詞の前に置かれるケースがほとんどであった(32)(33)。

(32) E posserõ-na ã huñ loguar seco e espantoso esterrada ao qual ãõ podia hir ãõhuñ **pera** a cosõlar e ella leixa em sua cassa cõ prazer seu marido e huñ filho que avia (p.227)

(33) E muyto ameude era arrevantada fora de sy ã spiritu ã contêplaçom e o angio a guiava **a** lhe mostrar os loguares das penas dos maaos e os prazeres dos justos. (p.371)

同作品では、現代欧州ポルトガル語とは異なり、動詞の前にproclisadorが生起しない場合においても、接語代名詞が動詞の前に置かれることがある。そしてこのような例は、直接話法部分において頻繁に見られる傾向にある。

(34) Oo Ciriaco, se me lanças daqui, eu te farey hir a Persia. (p.14)

(35) Senhor Deus, tu me livraste de pressura da chama segundo a multidom da misericordia do teu nome e ã meo fogo ãõ fuy queymado. (p.16)

(36) Ide-vos ãõ fudo do mar maas cobiçças, eu vos afũdarey ãõ peego (p.57)

(34)では、直説法未来形の動詞(farey)の前に二人称単数形の接語代名詞(te)が、(35)では、直説法完全過去形の動詞(livraste)の前に一人称単数形の接語代名詞(me)が、(36)では、直説法未来形の動詞(afudarey)の前に二人称複数形の接語代名詞(vos)が、それぞれ置かれている。(36)の冒頭のIde-vosのように、接語代名詞が命令形とともに用いられる場合には、例外なくその後ろに置かれるものの、それを除くと、接語代名詞の位置が動詞や代名詞の種類や形に依存していると判断できる材料を今回の調査から見出すことはできなかった。ただし、このような例に共通する特徴としては、主語が明示される傾向にあることが挙げられるだろう<sup>14</sup>。Horto do Esopoでは、直接話法以外でも、一人称で語られる部分が散見されるが、その場合には主語は省略され、また、接語代名詞の位置も動詞の後ろとなっているケースが多い。

(37) Depois que eu esto jurey, leixarõ-me e torney-me pera aquelles que comigo estava e maravilharõ-se todos. (p.75)

最後に、直説話法部分以外にも、proclisadorがないにも関わらず接語代名詞が動詞の前に置かれる例として、2つのケースに言及しておきたい。

(38) E ella me disse: "Quê som eu? "Eu respondi-lhe: "Parece-me que sodes a beêta Virgem Maria". E ella me disse: "Para mentes aas minhas costas". E eu parey mentes aas costas della, e vi-a podre cõ muytos vermeês. E ella me dise: (p.22)

(39) E o diaboo lhe respondeo e disse. (p.139)

(40) E o sandeu lhe disse: Mas tu sejas maldicto, que sabias que eu era sandeu e creeste-me! (p.225)

一つは、上記のように、「そして私に言った」、「そして彼にこう答えた」のような、会話の流れを説明している短い文で確認できる例である。このような文ではdizerやresponderの直説法完全過去形が用いられることが多い。

また、Horto do Esopoでは、porémのような現代語ではproclisadorとして機能しないと考えられる語の後で、接語代名詞が動詞に前置される例も数多く確認された(41)。

(41) E **porê** a semête se ençuja e se corrompe e a alma, quando he lançada ão corpo, toma daly emçujamêto de peccado e de maldade e magoa da culpa. (p.111)

## 6. おわりに

これまで、Horto do Esopoで確認される接語代名詞について、動詞の前に置かれる場合と、動詞の後ろに置かれる場合について概観した。

同作品では、動詞がproclisadorと共に起する文脈では、現代欧州ポルトガル語同様、接語代名詞は動詞の前に置かれるが、否定文や従属節においては必ずしもその限りではな

<sup>14</sup> 同作品では、話し相手に対する呼びかけからはじまり、それに続いて接語代名詞が動詞の前に置かれるような発話が数多く確認されたが、このような形式は他の中世ポルトガル語テキストでも確認される。以下は *Demanda do Santo Graal* のものである。

Rey Euadac, se me tu quiseses eu **te** aconselharei em tal maneira que aueras ledice sobre todollos teus emigos. (DSG52)

い。しかし、否定辞や補文標識の後に続く場合や、複文において、代名詞が動詞の後ろに置かれる例の数はそれほど多くはない。写字生の特徴との関係にも留意し、分析を進めていきたい。

一方、proclisadorと機能している語句がないと考えられる文脈において、接語代名詞が動詞の前に置かれるケースも多数確認できた。そしてその傾向は、直接話法部分で強く見られる。しかし、*Horto do Esposo*で見られる直接話法は、発話の形式が似通っているものが多いため、これと接語代名詞の位置との関連性について考える際は十分注意しなければならない。他の中世文学作品における直接話法との類似点、相違点についても考慮する必要があるだろう。

*Horto do Esposo*は当時には珍しく、他の言語からの翻訳ではなく、ポルトガル語で書かれた文学作品であり、また、古ポルトガル語から中期ポルトガル語への移行期に作成された。「古い」語形と「新しい」語形が混在する同作品の言語については、統語論的観点から分析を進めていくことで、その特徴がより明らかになっていくのではないだろうか。



## 参考文献

- Castro, Ivo. (2004): *Introdução à História do Português*. Lisboa: Colibri.
- Demanda do Santo Graal* — Martins, A. M. & Sandra Pereira. 2014-2015. POS-tagged *Demanda do Santo Graal*. CC licensed: WOChWEL by Centro de Linguística da Universidade de Lisboa
- Horto do Esposo* — Edição de Irene Freire Nunes, coordenação de Helder Godinho — Estudos Introdutórios de Ana Paiva Morais e Paulo Alexandre Pereira. Lisboa: Colibri, 2008.
- Maler, Bertil. (1956): *Orto do Esposo. Texto inédito do fim do século XIV ou começo do XV. Edição crítica com introdução, anotações e glossário. Vol. I. Texto Crítico*. Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro.
- (1956): *Orto do Esposo. Texto inédito do fim do século XIV ou começo do XV. Edição crítica com introdução, anotações e glossário. Vol. II. Comentário*. Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro.
- (1964): *Orto do Esposo Vol. III. Correções dos vols. I e II, estudo das fontes e do estudo da língua, glossário, lista dos livros citados e índice geral*. Acta Universitatis Stockholmiensis. Romanica Stockholmiensia 1. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Martins, Ana Maria. (2016): A colocação dos pronomes clíticos em sincronia e diacronia. In: Ana Maria Martins & Ernestina Carrilho (eds.), *Manual de Linguística Portuguesa*. Berlin/Boston: De Gruyter. 401-430.
- Mateus, M.H.M et al. (2003): *Gramática da Língua Portuguesa*, Caminho.
- Modena, Martina. (2016): *Horto do Esposo*. Edizione critica elettronica (Tesi di Dottorato). Venezia: Università Ca'Foscari - Scuola Dottorale di Ateneo.

(最終原稿受理日 2024 年 6 月 6 日)

(みずぬま おさむ / 東京外国語大学)